

沖縄歴史の散歩道

グスクを歩く(2)

沖縄復帰50周年企画として、「群星」紙上及び沖縄総合事務局ウェブサイト「オキナワンパールズ」にて歴史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を紹介します。 <https://www.okinawan-pearls.jp/>



勝連城跡

首里城に代表されるような沖縄の大型グスクの特徴は、日本本土より約2000年早く総石垣の城郭が登場したこと、本土の城壁が直線を基調としているのに対し、グスクの城壁は柔らかな曲線を描く美しい造りをしていること、天守閣が存在しないことなどです。とくに首里城の正殿は中国の宮殿建築をベースとしたもので、異国情緒あふれる雰囲気を出しています。

サンゴ礁の島である沖縄は琉球石灰岩が多量に産出することから石造技術が発達し、いち早く石垣の城壁を採用しました。また琉球石灰岩は比較的加工が容易なことから自由なデザインを可能にし、曲線のデザインを実現しました。グスクにはアーチ門や「張り出し」と呼ばれる城壁の防御施設など、中国大陸から導入した技術が使われているのも特徴です。グスクはまさに沖縄の自然環境と、海外交流がさかんだった交易国家の歴史が生み出したものといえるでしょう。

城塞として発達したグスクですが、宗教的な性格は消え去ったわけではなく、引き続き御嶽などの聖地を取り込んだかたちで機能し続けました。多くのグスクで、城門や正殿の方角を夏至の日の出の方向に一致させている事例が確認されて

います。玉城グスク(南城市)の城門はよく知られていますが、勝連グスク(うるま市)や中城グスク(中城村)、糸数グスク(南城市)なども同様です。古琉球の神歌集『おもろさうし』には、中城グスクの城門を東方の「てだ(太陽)の穴」に向けて建て直したと謡われています。太陽信仰がさかんだった当時の琉球では、1年でもっとも太陽の力が強い夏至の日の出を取り込む意図があったと考えられます。



玉城(たまぐすく)城跡/城壁

また石垣のイメージが強いグスクですが、実は「土のグスク」も多数存在していて、沖縄島北部から奄美地域にかけて広く分布しています。例えば名護グスク(名護市)は石垣がなく、土で造成されたグスクです。琉球石灰岩がそれほど採れない地域的な理由があったようですが、実

は石垣のグスクにも土の城郭を併用する例が見つかっています。浦添グスク(浦添市)や勝連グスクでは、石垣の城郭の外側に堀切や土で造成した区画を設けていたことが明らかに なっています。グスクは想像以上に多様で複雑な姿をしていることがわかります。



高宮城(たかみやぎ)遺跡

上里 隆史(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポードーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」の時代考証を担当。